

# 英知通信



昭和44年6月15日

英知大 学

No.1

## 入学おめでとう

本日ここに、昭和四十四年度、英知大学文学部及び英知短期大学宗教科の入学式を平穩のうちに、且つ厳肅に挙行致しますことは、英知大学にかかわるすべての者にとりまして大きな喜びであります。本学の入試に合格され、只今ここに入学された新入生の皆様に対し、私は本大学を代表して、心よりおめでとくと申し上げます。また新入生の御父兄の方々に對しましても、御子弟を本学に入學させられ、お喜びのことと存じ、お祝ひ申し上げる次第であります。

## 式辞

学長 岸 英司

### はじめに

新入生の皆さんは本日からは大学生であり、英知大学の一員であります。世間におきましても、皆さんは最早生徒と呼ばれず、学生と呼ばれるのであります。

大学とはどういう学校であり、大学生とは何であり、大学生活の意味はどこにあるのか、といったことをこれからの皆さんはよく考えそしてこれを把握しなければなりません。今日、多くの大学では、紛争のため大学本来の教授及び研究活動が不可能となっている所もありますが、又一方ではこれを契機として、大学

の本質についての深刻な反省というものが、大学の内外において起つてまいっております。

私達は今日、二十世紀の後半に生きているのであります。現代を特色づけるものは、前大戦の終りに実現した原子力の解放に象徴されるような自然科学及び技術の驚異的發展ということでありましょう。電子計算機は今日の社会の花形でありまして、今日私たちが享受している物質文化というものは、高度に発達した科学技術に支えられており、またこの現代文化は更に科学技術の進歩を促しているのであります。ところが人間あるいは人間性というものは本来変わらないのであります。例え

ば昔のギリシャ神話の物語りが、全く今日の人間の物語りをあらわすといったことがあり得るのであります。現代の科学の進歩に對しまして、それに対応した人間の進歩はなく、むしろ人間の退歩がありうるというのであります。今日私達が切実に感じますことは、この現代社会で、人間はあたかも巨大な機械の一つの歯車のようにある必然的な力によって機械的に動かされ、人間的であること、個性的であることが困難であるということであります。例えば、テレビは今日私達の人間生活に大きな貢献をなしておりますが、又一方では人間から個性的思考と勉

学の習性をとり去り、一つの思想に對して巨大な人口を動かす危険があることも事実であります。

このように、今日の時代は人間喪失の時代とも言えるのであります。現在の大学紛争も含めて、今日の社会のいろいろの現象は人間の内なる精神性、永続なるものへのあこがれ、人間回復の叫びとも考えられるのであります。

さて、このような時代の動きの中で、私達は私達の生きる場である大学というものを考えなければならぬわけであります。

私はきょう新入生の皆さんに對し、大学の理念とカトリック大学及び本学建学の精神について、私の日



頃考えておりますことの一端を申し述べてみたいと存じます。

### 大学とは何か

先ず大学とは何であるかということであります。御承知のように、日本の大学は明治時代になって、西欧の大学理念と制度を取り入れて発展してきたものであります。それゆえ、大学の本质についての考察には、西欧における大学というものを考えてみなければならぬわけであります。ところが、西欧の大学と申しますものは、普通の学校とか一般学校とでも申しましょうか、中世におけるストウディウム・ケネトラレ

(Studium Generale) から発展してきたものであります。この普遍的・一般的という意味は、上として学生があらゆる場所から来たからであります。これが十二世紀の終り頃から発達してまいりました。当時、最も有名であったものは、パリとボロニアのそれでありました。両大学の博士たちはどこでも教える権利を所有し、これが Studia Generalia として知られるようになりまして、この Studium Generale というものは、ローマ法王、または帝王、諸侯の被護の下に設立され、各学科を教える学位 Doctor とか Magister を与える教育機関のことであります。従つて、大学の始まりにおきましては、大学は教職免許とかたく結びついております。大学の創設の始めには法王とか国王の勅書を必要としたのであります。オックスフォード大学はそういうものなしに内容充実の事実からして、大学として認められるに至りました。

さて、今日の大学という言葉に相當する Universitas という言葉は、根源的には Studium Generale の中の教授及び学生の団体、ギルドのことであります。時として、教授のみの団体、或は学生のみの団体を呼んだこともあります。十三世紀には Universitas は学問の総合 Universitas litterarum の意味で用いられるようになり、また十四世紀後半には、今日私達が母校と呼ぶ Alma Mater という言葉も使われ、中世紀の終りには Studium Generale と Universitas の間の区別が次第に無くなり、後者だけが使用されるに至つたのであります。

このように大学の始まりが、教授と学生の団体 Universitas Magistorum et Scholarium であつたという事実は、大学が学問の総合 Universitas Literarum を目指して来たということと共に、今日の私達に大きな示唆を与えるものであると私は考へます。

中世の大学における主な学科は、神学、哲学、法学及び医学でありましたが、近代になりますと、哲学は神学から独立し、自然科学は哲学から独立し、また種々の人文科学、社会科学が起つてまいりまして、今日では大学は数多くの学科を持ついわゆる総合大学としての姿をとつてまいりました。ところが、今日では学

### カトリック大学の理念

さて、英知大学はカトリック大学であります。これはどのような意味を持つのでありましょうか。

先づ一般に、諸学の教授及び研究を目的とする大学の存在は、論理的に申しまして、諸学における真理の存在を前提としたものであります。即ち、学問上の真理の存在を認めてゐるのであります。もしそうでなければ、それを教授することも研究することも全く意味をなさないわけでありませう。ところが、より高次の学はより単純な原理に還元されなければならぬのでありまして、いかなる原理をも提示できず、ただ現象の叙述にのみ終るが如きは学の名に値しないものであります。ここにのみましましてカトリック大学はその根本的

科の細分化、専門化が益々進み、総合大学とは名ばかりの存在となり、中世紀からの伝統である学問の総合、世界観の統一というものは今日では殆んど望み得ない状態であり、更に教授と学生との共同体 Universitas も崩壊しつつあります。これは大学が崩壊しつつあるということであり、これは今日の多元的社会における必然的運命であると言へばそれまでであります。大学本来の姿は諸学の総合、即ち学と学の間における秩序づけと教授と学生の協同にあるのであります。今日、このような大学の崩壊ということと人間喪失ということとは無縁ではないのであります。

を認めるのであります。即ちその根



抵には一つの哲学、ライブニッツの言葉をかれば Philosophia perennis 「久遠の哲学」が前提されてゐるのであります。それは言わば「形而上学の偉大さとみじめさを知るもの」、「人間の条件」のダイナミックな限界を知る哲学であります。即ち人間の諸学を秩序づけるものとして哲学を、更に哲学を導くものとして神学を認めるのであります。各々の学は独立して互いに無縁なものではなく、各々の学はそれ独自の研究方法と結論において全く自由にそして独立していながら、しかも同時により高次の学、真理に従属するのであります。即ちそこには理念の統一があります。実はこの理念の統一なくして、人間の統一はありえませぬ。私たちの学問研究は私たちの存在そのものとの何かかりもないアクセサリのようなものではなく、私達の存在そのものにかかわることな

であります。それゆゑ、学問と人間存在との統一を私達は主張するのであります。

カトリック大学の意図する第一のものは、このような真理追求の態度であります。私達の学問研究を支えているものは、真理の存在と共に、個々の真理が究極的には絶対的真理に全く従属しているという確信、世界観であります。この確信ほど強い学問への清熱はないと申して過言ではありません。

カトリック大学の意図する第二のものはキリスト教的ヒューマニズムであります。すなわち、人間はすべて人格として尊重されるということでありませぬ。これは、人間が手段としてではなく、目的として認められるということであり、人間が「物」として取り扱われることを絶対に拒否するということであり、一切の物質的なものに対して、靈的、精神的価値の優位性を認めるということでもあります。従つて、人間の知性と自由意志の主体である人格としての人間価値が守られなければならないというのであります。ここから、現代の大学の在るべき姿が明らかとなつてあります。

学生は単に受動的に授業を受ける者であつてはならないのでありまして、教授と共に一人の同じ価値を有する人格として、能動的な真理追求者でなければならぬのであります。ここにおいて、真理の追求と人間形成は分離されたことではなく、真理の追求において人間形成が、人間形成において真理の追求が実現しなければならぬのであります。

### 建学の精神

次に、英知大学の建学の精神についてふれてみたいと存じます。本学の名が示しますように、本学の建学の精神は「英知」であります。英知とは何であるかということが問題であります。古来、ギリシャの世界、ヘブライの世界、またエジプト及び東洋におきましても、英知というのは先ず人間のよく生きる術を意味しました。即ち人生における智慧であります。

六世紀のギリシャにおきましては、この英知は思弁的となり、哲学のうちに留まるものとなり、又一方古代における科学の発展において、英知は文化の重要な要素となりました。即ち、英知は古代のヒューマニズムであつたのであります。

ヘブライの世界におきましては、神の言、ロゴスは英知の形であらわれ、イエズスは神の英知をあらわし、英知の賜に対する思想はキリスト教的思想の深さを垣間見させておられます。

インドにおきましても、智慧は知識を超えた知、悟りとして、人間の究極目的となりました。智慧なくして、他の一切の完全性、徳は存在せ



ず、智慧は世界の実用、プラフマンであり、佛であるのであります。このように、西洋におきましても、東洋におきましても、英知というものは単なる知識ではなく、体験に裏づけられた最も具体的な知を意味しております。それは体験なくして獲得できないものでありまして、トマス・アクイナスは英知は経験的の知であり、*Sapida Scientia* (甘美な

る知)であると申したのであります。英知大学は、英知の学である神学と、西洋の文学を研究する学科を持つ大学であります。その建学の精神としてもつとこのものは、人間の智慧を超えて神の智慧にまで至る英知であります。新入生の皆さんはすでに御覧になられたと存じますが、この度出来上

りました新館の西側にはイタリア製大理石聖母子像があります。その下にはラテン語で *Sedes Sapientiae* という文字があります。これは直訳しますと「英知の座」ということでもあります。現代の言葉で申しますと「英知の場」ということになるかと思ひます。西欧キリスト教世界におきましては、聖母は、英知の師であり、神の英知であるイエズスを生

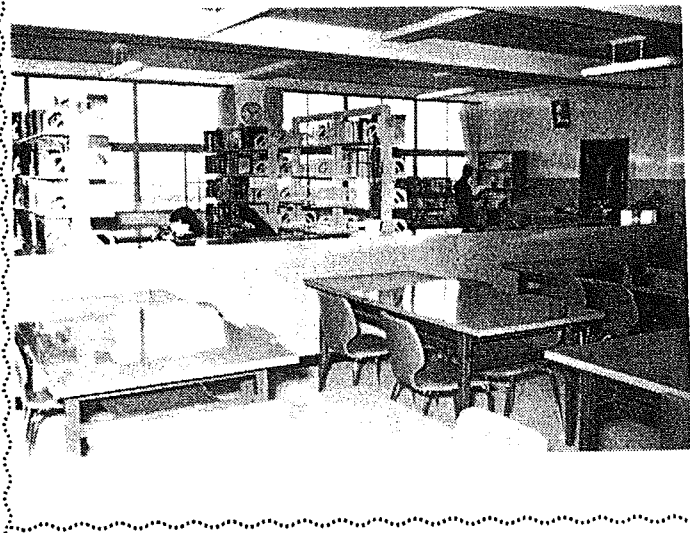
# 大学における図書館

瀬尾修

社会制度としての大学に対する改革要求の声は、いまや世界的な流れとなりつつあり、ひいては大学の理念そのものも、根本的に検討され直されるべき時を迎えた感がある。しかしながら、大学の目的が教育と研究にあることは、大学の存在を肯定する限り、何人も否定することができない基本的事実であるといわねばなるまい。

大学における図書館は、大学における教育および研究活動が効果的に行われるための基本的な施設である。すなわち、大学は単に資料の効果的な利用を図り、積極的に学生・教員及び研究者に協力するという重要な役割を担っているのである。したがって大学図書館は、大学における教育活動を援助するサービス機関であると同時に学術研究活動を促進するための資料センターであることが期待されるのである。

これらの目的をはたすためには大



(本学図書館長)

する有機体である」と述べている。図書館は、図書資料、利用者および図書館人が一体となつて育成して行かなければならない有機的な存在であることを認識させることばである。

み、養ひ、育てた母として、*Sedes Sapientiae*と言われるのであります。大学はまた実に、この英知を求め、英知を実現する場なのであります。この *Sedes Sapientiae* という言葉は大学の本質を指示する誠に意味深い言葉なのであります。

本学は東洋において、西洋文化を研究する学府として、単に西洋的意味における英知を追求するのみならず、東洋的智慧をも求めるのであります。否、英知は一つであるという確信の下に、いわば東洋と西洋の接点として、ここにその存在理由を持つのであります。

最後に一言申し上げたいことは、大学の存在は普遍的真理を認める人間形成のためであるということであり、大学は国家のため、国民のためというのでは足りません。それは人間のためでなければなりません。本学は「人間のための大学」の理想を追求するものであります。創立以来、日まだ浅く、理想の実現は程遠いと感ずるものではありませんが、私達は一步一步、現実を押し進め、理想に近づきたいと念願しております。新しく大勢の皆さんをお迎えして、共にこの大学の創造的業に努力したいと存じます。

国家も世界も人間の究極的目的ではありません。人間は国家をも、世界をも超えた究極的実在に秩序づけられるとき、はじめて真に解放された人間となるのであります。真に解放された人間こそが、実はこの国家を、この世界を生かすことができるのであります。この自由なる人間の形成は英知なくして実現致しません。

## 職業指導課

### 就職率

英文科 92 %  
西文科 100 %

新入生の皆さんが、これからの二年間或は三年間を研究活動と課外活動を通じて充実した学生生活を送られるよう希望致しまして、私の武辞と致します。

(昭和四十四年四月十日)

卒業生の就職については、もっぱら職業指導課がこれにあつて、相談室には職業選択に関する図書、印刷物等の諸資料がそなえられ、学生は常時、係職員と個人的に相談することが出来る。

就職を希望する学生についてはその家庭状況、身体生活状況、性格、趣味、学業成績等を調査し、適職のあつせんにてきうる限りの努力がなされている。また、本学はカトリック系であるので、信徒である諸会社の有力者の協力を得べく各界に働きかけている。

昭和四十四年度卒業生は、英文科三十名(うち女子十五名)、西文科十九名(うち女子十四名)、神学科七名で英文科の就職率九二%、西文科一〇〇%、神学科一〇〇%であつた。

